HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	李光洙と、植民地支配下における朝鮮の「民族」概念の二重性 : 普遍的・構造的な問題への視点（前）
Author(s)	権, 錫永
Citation	国語国文研究, 117, 57-67
Issue Date	2000-12-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94657
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_117_57-67.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

李光洙（イグァンス）と、植民地支配下における朝鮮の「民族」概念の二重性

――普遍的・構造的な問題への視点――（前）

権　錫　永

はじめに

植民地支配から「解放」された後の韓国において、文学に携わる人々は民族文学の建設の仕事に邁進し[1]、親日行為が盛んになる一九四〇年代前半は文学の「空白」として長い間葬られることとなった[2]。「親日文学」については一九六〇年代の半ばあたりからまとまった研究[3]が出はじめ、今では多くの研究成果に触れることができるようになった[4]。研究態度の面からも同じことが言える。例えば一九七〇年代後半、李甫永は、「植民地時代の韓国文学は日本の明治・大正・昭和文学が移植されたもの」とするいわゆる「移植文学論」、植民地時代の文学を簡単に素通りしようとする「植民地文学留保論」を批判し、個別の作品への真摯な取り組みを促したが[5]、現在では柔軟な研究態度から多彩な成果が上がってきている。だが、本稿で取り上げる李光洙――または、朝鮮の知識人全体――の問題で言えば、まだ不十分な点があることは否めない。

およそ親日派と言われる韓国の知識人は「民族」というものにもこだわりを見せたが、後に見るように、李光洙は特に、文学者として登場した頃から「民族」に固執していた。この問題をどう処理するかが、李光洙研究の大きな難点であり、まだ従来の研究ではそれが処理しきれていないように思われる。例えば、李光洙批判としてキムヒョンの論文に「民族のための親日」[6]という表現が見られる。どのように評価すべきかはさておいて、残された資料や証言からみてこれは最も適当な表現のように思われる。しかし明らかにされるべきなのは、なぜ李光洙に見られるような「民族のための親日」行為が起こったのかという問題である。キムヒョンは先の論文で、李光洙が「民族改造論」[7]などにおいて「政治的な問題を排除して道徳的な次元での改造」だけを意図したところに、「民族のための親日」への転換の「素地」を見ている。李明宰はこれを受けて、さらに李光洙の歴史意識の欠如と、トルストイやガンジーの影響による「無

抵抗主義」を原因として挙げる一方で、伝記によって精神分析的に原因を究明しようとする。[8] また、わりと最近の研究として木村幹の論文[9]が注目される。木村氏は、李光洙があらゆる伝統的なものを否定していて、[10]その「民族主義」には「核」になるものがないことを指摘し、このことと「〈日本人〉概念の特殊性」――つまり、「同化」という回路を通して参入していける開かれたものとしての「日本人」――が相まって生じた結果だと述べている。[11]そして木村氏は、従来の研究における批判は、李光洙（や朱耀翰）の民族主義を「軽視しすぎている」からだとし、李光洙の動向は「実力養成」「将来の独立」のための「運動」の「継続」だったと結論づけている。ここには李光洙に対する最大の理解が示されており、その可能性を認めることに私は決してやぶさかではないつもりである。だが、それが可能性として言い得るとするならば、その逆もまた可能性として濃厚だと見るべきではないだろうか。言い替えれば、この範囲での、李光洙の「民族主義」を認定するかしないかという議論は、一種のいたちごっこの印象さえ与えているのである。

さて、現在韓国で為されている研究にひとまず戻ってみよう。親日文学者の問題は、例えば李光洙で言えば、もっぱら彼の問題として、つまり特殊性として片づけられてしまう傾向が強い。[12]そうしたそれぞれの知識人の特殊性は確かに認めるべきであり、親日文学者を十把ひとからげに論じることはもちろんできない。しかし、差異は差異として念頭に置きつつ、同時に、問題の普遍性に目を向けることも必要なのではないだろうか。この意味で、木村氏が「〈日本人〉概念の特殊性」を持ち込んだことは大きな意義を持つ。それは多民族国家としての「日本」の中のあらゆる被支配民族にあてがわれた支配装置だったからだ。それぞれの個人の特殊性は、この装置を前提にして発現される。李光洙の歩んだ足跡には、当時の朝鮮の知識人の問題を構造的に捉えることを、部分的にではあるが、可能にしてくれる様々な要素が刻み込まれていると思われる。

一　親日行為の様相――一九三八年以降

「修養同盟会」と、その後身である「同友会」で「啓蒙活動」を続けていた李光洙にとって、「同友会事件」は一つの転機をなすものであった。[13]これは一九三七年六月、李光洙を含む同友会関係者が逮捕され、合わせて一八一名の逮捕者と四二名の起訴者を出した事件である。すでに一九二〇年代から、「民族改造」運動から政治的色彩を取り除くことを主張し、あくまでも合法的な運動に終始した李光洙であってみれば、その衝撃も大きかったことだろう。

一九三八年三月に、皇軍慰問作家団が結成されると李光洙はそれに参加し、本格的な親日活動をはじめる。[14]それまでの政治が「民族のため」の「啓蒙運動」を続けていたということ（後述）を念頭に置きながら、一九三八年以降の文章を見てみよう。彼は、朝鮮への志願兵制度の実施を受けて、随筆形式で次のように書いた。

> お母さん、息子さんをお持ちですか？　それならば、志願兵として行かせなさい。その息子さんが大事ですか？　そうであればこそ、なおさら行かせなければなりません。一人息子です

か？　そうであっても、志願兵として行かせなさい。[15]

この強圧的で理不尽な要求は、「皇民化」こそが唯一の「朝鮮民衆の進路」[16]であるとする考えにつながっていた。以前、李光洙は「民族改造論」などで、朝鮮人の道徳的・精神的な堕落とそこからの救済を主張したが、この頃になると、朝鮮人が救われる道は「皇民化」の他にないと唱えるようになったのである。「皇民化」への志向により、彼はますますファナチックになって朝鮮人に檄を飛ばす。

この聖戦の勇士として／呼ばれた君――朝鮮の学徒よ／志願したか、志願したか／――特別志願兵を――／いったい、何ゆえにためらうのか／（略）／征け、朝鮮の六千学徒よ／三千万同郷人の先頭に立て／銃後の国民の大いなる寄託と／娘たちが縫いつけた万人針（ママ）を巻いて征け[17]

至極なる皇恩、
さあ、朝鮮の同胞たちよ
我らがあることによって、なお大きな戦いを勝利に導こう
我らがあることによって、大アジア建設を完遂させよう
こうしてはじめて大いなる御恩に報い、仕えることになろう[18]

こういったものの中から民族主義の「継続」性を読みとることは、とても無理だと言わなければならない。この問題を考えるためには、一九一〇、二〇年代の彼の民族との関わり方及びその性質を見る必要があるが、そこからはさらに別の問題が生じてくる。そこで、詳説は後回しにして要点だけ言っておくならば、例えば、一九二〇年代の李光洙の作品には、政治的な問題が排除され、当面の〈敵〉というものがほぼ完全に消されており、従来言われてきたように伝統的なものの完全否定＝「文明化」志向がそこにはあった。これを民族主義と言うとすれば、確かに一九三八年以降の李光洙の仕事も民族主義の「継続」だったと言えなくはない。従って、問題の根源は遡って一九一〇、二〇年代の仕事に見いだすべきであり、そこから民族主義か否かという議論の有効性／不毛性も明らかになるだろう。

二　「民族改造論」・「民族的経綸」――上海時代以降を中心に

李光洙は二回にわたって日本に留学している。最初は大城中学と明治学院で学び、その間には他の留学生と共に民族運動にも参加していた。第一高等学校に合格した彼だが、「民族活動の実践」[19]のために入学を断念して故郷に帰り、五山学校の教員となった。二回目の留学では、早稲田大学文学部哲学科に入学（一九一六年）し、創作を始め、民族運動にも参加している。[20]第一次世界大戦後のウィルソンの民族自決のテーゼに触発される形で、留学生の間でも民族主義の傾向が強くなり、民族運動も活発になった。一九一九年の「朝鮮青年独立団宣言書」[21]は「留学生の総意として出された」ものだが、それを執筆したのは李光洙であった。次の引用文はその一部分である。

吾族ハ正当ナル方法ニヨリテ吾族ノ自由ヲ追求スヘキモ若此ニテ成功セサレハ吾族ハ生存ノ権利ノ為メニアラユル自由行動ヲ取リ最後ノ一人マテ自由ノ為メニ熱血ヲ濺クモ辞セサルヘシ、此豈東洋平和ノ渦源ニアラスヤ、吾族ハ一兵ヲモ有セス、吾族ハ兵力ヲ以テ日本ニ抵抗スル実力ナシ然レトモ日本若シ吾族ノ正当ナル要求ニ応セサレハ吾族ハ日本ニ対シ永遠ノ血戦ヲ宣スヘシ。

武力闘争をも辞さないとするこの宣言の思想はすなわち李光洙のそれであると木村氏は見ているが、そのように見たときに、その過激性がどれだけ彼の心底から出たものなのかは問題として残る。どちらかと言えば、後で検討するようにその過激性は彼の思想的な方向からいくらかはみ出たものという感さえある。[22]

また、李光洙はこの年に上海に渡って、独立宣言を世界に知らせることや、「大韓民国臨時政府」の設立のために積極的な活動を行い、その機関誌「独立新聞」（当初の名称は「独立」、一九一九年十月十五日から変更）の主筆も勤めた。[23]「独立」にも先に見たような過激性は現れている。

我々が要求する唯一のものは自主独立である。自主独立の目的が達せられる日まで、我々は叫び、戦闘し、最後の一人が殺される時まで戦い続けるのだ。二万人のわが国民が血を流しても目的が達せられないのなら、二十万人が、そして二十万人でも足りないなら、二〇〇万、我々には二〇〇〇万の同胞がいるのだから。[24]

しかし、この新聞の論説にはまもなく変化が現れる。木村氏はこの変化を先の論文の中で次のように捉えている。運動における「文化的価値」の強調、「列強からの後援を強く求める」方向への転換、それはすなわち、「独立闘争における軍事的・物理的側面よりも、寧ろ、平和的・倫理的側面を強調するものであった」と。ちなみに、この変化の要因としては、臨時政府の財政難、アイルランドの情勢（一九二〇年三月にイギリスが独立を承認）などが挙げられている。その後まもなくして、李光洙は帰国して啓蒙活動を進めることになるのだが、彼はそれを「主権を失った植民地の独立運動は国内で行わなければならない」との「結論に至った」[25]からだと、後に書いている。しかし、彼の帰国後の仕事には、当時の朝鮮総督斉藤実との金銭授受問題などが絡んでいる。[26]

ここで李光洙の問題と共に、一九一九年の三・一独立万歳運動の後に始まった「文化政治」についても確認しておこう。姜東鎮は綿密な調査に基づいて、「反日気運の去勢」に役立った「文化政治」を論じ、その中で李光洙の総督府との癒着について詳しく述べている。[27]姜東鎮によれば、斉藤実は、高まってきた「反日気運を、大事に至るまえに先手をうって未然に防止すべく、この気運を逆利用して、妥協的方向にそらすことを画策」したが、そこで登場してきたのがいわゆる「文化運動」である。「文化運動」で利用されることとなったのは、「実力養成」派の民族意識である。総督府は彼らをして「民衆の熾烈な反日独立志向意志を対日妥協の方向に誘導し、それに

よって民族独立運動を去勢しよう」としたのであり、それは結局のところ「民族分裂政策の一環」として為されたものであった。「文化運動」推進の具体的綱領としては「参政権獲得請願・実力養成・民族性改造」が打ち出された。しかし、従来の親日勢力をもってしては反感を買うだけであったために、「民衆に影響力のある著名な民族主義者数名を懐柔して、彼らをして民族改良主義を宣伝流布させる方針」が立てられ、朝鮮の多くの若い民族主義者が、「説得工作」によって利用されることとなった。李光洙もそのうちの一人である。

李光洙が総督府と癒着していた証拠は多く挙げられているが、例えば、李光洙が当時の「京城日報」の社長阿部充家を通じて斉藤実に提出した「建議書」があり、さらに「総督府のあっせんで、手当だけでも月額三〇〇円の高給で東亜日報の論説委員とな」ったとされる。ウィギボンによれば、「東亜日報」は、三・一運動以降に堰を切ったように創刊される「地下新聞」に対抗するために、斉藤実を黒幕として創刊されたものである。[28]

だが、こうした癒着関係が、李光洙の問題を解く万能カギになるわけではない。重要なのは、癒着関係が生じうる李光洙の内在的な要因、及び当時の朝鮮が置かれた歴史的な条件である。この後、上海から帰った後の彼の評論を検討することにするが、その目的は、これらの評論の「文化政治」の方針との関係を明らかにすると同時に、その論理上の特徴などを確認し、上海時代以前との比較を可能にするところにある。なお、「文化政治」との関係を確認するのは、それが朝鮮の知識人のあり方を決定する重要な要素の一つだったからである。

「民族改造」は「私の一生の目的」であり、今は「世界的」な「改造の時代」であるとして始まる「民族改造論」で、李光洙が改造すべきものとして主張するのは「民族性」「道徳的方面」である。それは「朝鮮民族の衰頽の原因は道徳的原因が根本」だという認識に基づいたものである。まず改造運動の方法を見ると、基本的には、「自己の目的を意識的に確立」し、その達成のために「組織的で統一的な計画を立て、またその実現のために「組織的で統一的な努力」が為されなければならない。さらに具体的に挙げられた要素としては、①団体事業、②継続的、③脱「政治的色彩」、④教育を根本として、⑤教育のための人物の養成、⑥巨額の資金などがある。

では、改造すべき具体的な内容はどうだろうか。朝鮮民族には「根本的な性格」としては長所が多い――従って、改造しやすい――とされ、例えば、仁・義・礼・勇、現代語で言えば、寛大・博愛・礼儀・禁欲的（廉潔）・自尊・武勇・快活が、長所として挙げられている。また、短所になっているのは附属的なもので、先に挙げた「根本的な性格」（長所）から生じたものであり、例えば虚偽・懶惰・非社会性・経済的衰弱・科学の不振などが挙げられる。これは、植民地支配者の現地の人々への眼差しに酷似――支配者はこのような要素をもって被支配者を「野蛮」「未開」と規定する――していて、当然同時代にも批判を受けている。

> 今日我々が衰頽し飢餓による瀕死状態に至った原因は、我が民族の生理的不具とか精神的な欠陥――劣悪な民族性――にあるのではないことを看破すると共に、その原因がもっぱら征服と

搾取の事実にあることを断言する。[29]

このように批判した辛日鎔と李光洙との間には、根本的な認識上の違いがある。辛日鎔は「現在」だけを判断の根拠にして、現在の「瀕死状態」をもたらしているのは民族の資質ではなく日本による「征服と搾取」のためだと見ている。一方の李光洙は、「現在」だけが問題なのではなく、その「現在」――つまり、征服された状況――の原因でもある、過去から基盤としてあったものを問題にしているのである。李光洙が批判の根底に置いているのは、儒教を原理としてきた朝鮮社会である。彼が短所として挙げているもののうち、「虚偽」「懶惰」はおそらく非労働階級である両班階級を想定して挙げたものだろう。だが、全体的に見れば、それは「文明度」を尺度にして割り出したものであり、「文明化」を妨げているのは儒教的なものだと把握している。李光洙は「現在」よりも、征服・支配される「現在」をもたらした朝鮮の内在的な原因を言っているのであり、それらの原因は「文明」という色目がねを通して発見されたものだったのである。儒教やそれを原理とした朝鮮の支配階級の問題を、また「近代化」したか否かの問題を、「民族性」というふうに、朝鮮民族の特殊性として取り扱ったことは批判を免れない。[30] ちなみに、辛日鎔の場合は、内在的な問題を反省しないという点で一面的だと言わざるをえないが、その反面、すべてを内部の問題に還元するような愚を犯してはいない。こうした李光洙の「民族性」の規定と、その「改造」の主張は、明らかに「文化政治」またはその具体的な動向としての「文化運動」につながるものであった。

別の問題に移ってみよう。三・一運動は自主独立を求めての大規模な独立運動である。この運動の後に高揚した民族意識＝「精神の変化」を指して李光洙は、その変化は「急激」だが、「自然の変化」、「偶然に為される変化」、「無知蒙昧な野蛮人種が自覚なしに推移していく変化と同じ変化である」、と述べている。彼は、この「精神の変化」を全面的に否定しているわけではない。最大限に理解を示すとすれば、そうした「自然」的・「偶然」的な「変化」より、意識的・組織的・統一的な計画と努力による「民族改造」こそが、朝鮮民族に必要だという意味で捉えることができる。しかし、そう読むとしても、同時代の人たちもこのくだりに強い反発を見せているように、大きな問題が残る。例えば、辛日鎔は次のように批判している。「歴史的事実の無視があまりにも甚だしいのではないか。歴史的事実の発生した、その原因と結果にあまりにも盲目(者)ではないか」、「征服されて煩悶したあげく、解放を絶叫する運動ほど貴い運動はないはずである」、「悪政陋習の中で呻吟し、世界的新気運に投合して生を欲求した運動を指して、目的を欠いた運動だと判断する根拠はどこにあるか」、と。李光洙は三・一運動後の「精神の変化」を言っているように見えるが、辛日鎔はそれを三・一運動の否定として読んでいるのである。つまり、李光洙は三・一運動の後だけを取り上げているようで、実は、それは三・一運動そのものを否定するものだったと見てよい。というのも、その後の「精神の変化」＝民族意識の高揚は三・一運動の連続なのであり、それを李光洙自身の構想する「民族改造」の性質より下位にあるものとして見ること、言い替えれば、無計画的で「無知蒙昧な野蛮人種」の無自覚な変化と見ることは、

三・一運動をそのように規定したということに他ならないからだ。重要なのは運動の推進力である民族意識が否定されたということである。そして実際、李光洙は、民族意識の問題を離れて別の形で――運動のあり方そのものから――この運動を否定している。

政治的独立は一種の、法律上の手続きであるから、これは独立の実力があり時勢が合った時、国際的な手続きによって承認されるものであって、運動だけによって成し遂げられるものではない。我々は過去のつらい経験でこの貴重な真理を悟ったのである。我々は二度と救援を外部に求めるような愚を繰り返さないし、また目的を僥倖によって達成しようとする稚を繰り返すまい。

李光洙は、独立運動の価値を全面的に否定してはいないが、戦いによって独立を勝ち取るというやり方を排除している。さらに、「救援を外部に」云々や「目的を僥倖によって」云々は、三・一運動の根底にあったある種の甘さを自己批判したものだと言える。花田清輝はこの運動を次のように分析している。

とはいえ、彼等が範とした東欧、中欧、バルカン地方に、大戦後新興したポーランド、チェッコ等の民族国家は、その成立の条件に於いて、全然朝鮮とは相違している。ここでも朝鮮の独立運動者は、まったく歴史的認識を欠いていた。旧墺匈帝国、旧ロシア帝国がこれ等の地方の住民を支配したのは、資本主義、乃至はその発展した政治形態としての帝国主義によったのではなく、又、民族の自然的文化的条件に依頼したためでもなかった。寧ろその反対であって、極めて封建的色彩の濃厚な、前資本主義的段階に於てであった。[31]

李光洙が花田のように考えていたかどうかは別として、運動の甘さへの自己批判は正しい面を持っている。しかし、実はそれは、この運動に胎動した民族意識を排除することで言い得たものであるにすぎない。つまり、冷静な自己批判だけを並べ、重要な要素を排除するという、選択＝排除の論理があってこそ、三・一運動を「僥倖」に期待したものだと言い得ているのである。李光洙は明らかに、三・一運動における民族意識を、さらにはその後の民族意識の高揚を否定していると言うべきだろう。むしろ花田の方は先の評論の中で、「運動の結果がもたらした民族的統一」という「客観的歴史的意義」を高く評価している。李光洙がここで排除・否定している民族意識の問題も、先に見た民族意識の高揚への警戒という朝鮮総督府の思惑にぴったりあてはまっているのである。ただし、だからといって、彼が民族への執着を捨てたわけではない。民族の「団結」――政治的な意味を持たない限りでの――とか、民族の「文明化」という形でそれは維持されているのである。

次の問題は、従来よく指摘されてきた脱「政治的色彩」に関連する。李光洙によれば、民族改造運動は五〇年から百年で完成する長期にわたる運動――または「永遠の事業」――とされる。長い年月を必要とするために、政治的な団体としては維持することが不可能で

ある。なぜなら、政治団体は政権の推移のために事業の一貫性が妨げられるからである。さらには、「執権者の憎悪」を買うからでもある。そのためにこの運動は脱「政治的」でなければならないというわけだが、この論理そのものは至極妥当だと言えよう。

だが、改造運動から政治的な色彩を完全に消去することは、そうすることで運動の順調な運びと一貫性を維持できる代わりに、支配者との反目関係を消去するか、または伏流化させることを意味する。言い替えればそれは、苦しみの表現としての、高揚してきた民族意識を消去または伏流化させることなのである。もっと正確に言えば、他民族との関係の中で、抑圧されることで生まれる、その意味では自然発生的な民族意識を抑圧し、「文明化」による「近代」的な人間を作ろうすることであり、民族意識の向かうべき方向の切り替えの論理なのである。

「民族」・「民族性」の「意識的な改造」を考えるにあたって、李光洙の中でモデルとなったのは日本の明治維新前後の「近代化」のプロセスだったのかも知れない。わずかだが、「日本の維新史」についても触れている。だが李光洙は、そのような「改造現象」が生じるのは「民族の目的と計画と性質が民族的生存繁栄に適していないことが自覚される場合」であると述べ、明治維新と外部勢力との関係性に触れていない。このことは朝鮮の問題にそのままあてはまる。李光洙は朝鮮問題を、日本の支配による民族的な危機意識や被支配者的な意識によってではなく、もっぱら「民族改造」の内的な必然性――すなわち、朝鮮の非「近代性」・非「文明性」――によって説明しているのである。[32] もちろん、それが全く無益なのではない。選択＝排除の論理によって排除されたものが問題なのである。

以上で分かるように、「民族改造論」に支配的なのは選択＝排除の論理である。それによってある程度の説得力も持ち得ているし、同時にそれは当時の「文化政治」に合致するなど、多分に問題を含んでいる。「民族改造論」から二年後に発表された「民族的経綸」[33]になると、問題点はもっと明瞭である。

李光洙は朝鮮民族が「無計画状態」にあることを嘆き、「百年大計の三位一体」となる三種の分業的「大結社」を作るべきだと主張する。三種とは、「政治的結社」「産業的結社」「教育的結社」である。ここには「民族改造論」からの驚くべき変化が現れている。李光洙がここで説いているのは「民族改造」ではない。まず何よりも目につくのは「政治的結社」という言葉だろう。「政治的結社」の必要性は次のように説明される。朝鮮民族は「政治的生活」を全く持たない、世界にも稀な民族である。今、政治的自由思想の浸透により、「政治生活の欲望」は「独立した国家生活」においてよりも、「熾烈」になった。「政治的生活」がない理由は二つある。第一、日本が「政治的活動を禁止」したため。第二、朝鮮人は「日本の統治権を承認した上でのあらゆる政治的活動、すなわち、参政権・自治権の運動はもちろんのこと、日本政府を相手取った独立運動さえも」よしとしなかった。従って、「これまでの政治的活動は完全に日本を敵国視する運動ばかりであった」。では、政治運動はなぜ必要なのか。「当面の民族的権利と利益を擁護するため」であり、「朝鮮人を政治的に訓練し団結させて、民族の政治的中心勢力を作り、それを将来、久遠の政治運動の基礎とするため」である。

これは一見、朝鮮民族の将来の展開のために遠くを見通して提言したものに見えるが、このくだりのポイントは、「文化政治」の綱領に合致した「参政権・自治権」獲得の志向である。

次に問題になるのは、「教育的結社」についてである。李光洙は、「教育問題が諸問題解決の根本要素」だとし、教育の内容は「避敵・捕餌術」だと言う。「避敵・捕餌術」とは、「人生の敵」（気候・疾病の原因・他動物など）から自己を守る術と、「人生の餌」（飲食物・空気・薬品・涼室法など）を得る術を意味する。この二つの術は「物理学・科学・動植物学・天文学・地質学などの科学的知識」によって得ることができる、と。「民族改造論」で「道徳的」「精神的」な面での改造を重視していた李光洙は、ここに至って、それさえ完全に排除し、「科学的知識」だけを教育すべき内容として挙げているのである。

こう見てくると、李光洙の仕事が当時の日本の朝鮮支配の方針といかに密着していたかがよく分かる。しかし、この二つの評論にみられる脱政治性や選択＝排除の論理――植民地支配認定のレトリック――を、すべて総督府との癒着関係に還元させてはならない。というのも、そのような方法論は、李光洙の中の潜在的な要因を単純化しかねないからである。

［注］

（1）金允植著・大村益夫訳『傷痕と克服――韓国の文学者と日本』（朝日新聞社、一九七五年）の「日本語版への序文」。

（2）川村湊『南洋・樺太の日本文学』（筑摩書房、一九九四年）の「植民地文学とは何か」に指摘がある。

（3）林種国著・大村益夫訳『親日文学論』（高麗書林、一九八六年）

（4）例えば、金允植『李光洙とその時代』（全三巻）（ハンギル社、一九七六年）【韓国語】、李明宰『植民地時代の韓国文学』（中央大学出版部、一九九一年）【韓国語】、宋敏鎬『日帝末暗黒期文学の研究』（セムン社、一九九一年）【韓国語】など、その数は多い。

（5）李甫永「植民地文学批評方法の反省」（『現代文学』一九七九年二月）【韓国語】

（6）キム　ヒョン「李光洙と朱耀翰の文学史的位置」、金允植・キム　ヒョン共著『韓国文学史』（民音社、一九七三年【韓国語】）所収（第三章　第八節）

（7）李光洙「民族改造論」（『開闢』一九二二年五月）【韓国語】、『李光洙全集』（十七巻）（三中堂、一九六二年）（以下、『全集』とのみ記す）

（8）李明宰（注4を参照）（六章）

（9）木村幹「平和主義から親日派へ――李光洙・朱耀翰に見る日本統治下の韓国知識人の一断面――」（『愛媛法学会雑誌』一九九五年九月）

（10）李光洙の伝統否定については、すでにキム　ヒョンの指摘がある（注5に同じ）。

（11）一見して平凡ではあっても、従来、ともすれば民族抹殺を企んだ欺瞞として片づけられがちであった要素を、冷静に方法

化したところに木村氏の独特さがある。

(12) 知識人全体の問題に共通する問題を提示する場合が全くないわけではない。だが、文学研究においては、支配者である日本の言論・思想弾圧を論じて、当時が〈暗黒期〉であったことを説明するとき以外は、それぞれの文学者の問題が特殊性として論じられる傾向が強いのは否めない。

(13) 以下の二つが詳しい。金允植の研究(注4を参照)。高麗大学校民族文化研究所編『韓国文化史体系　1　民族・国家史』(高麗大学校民族文化研究所、一九七〇年)【韓国語】

(14) 林鐘国(注3に同じ)。木村幹(注9に同じ)

(15) 李光洙「母・妹・妻へ」(「三千里」一九四〇年七月)【韓国語】、『親日文学作品選集1』(実践文学社、一九八六年)所収

(16) 李光洙「内鮮一体と朝鮮文学」(「朝鮮」一九四〇年三月)

(17) 李光洙「朝鮮の学徒よ」(「毎日申報」一九四三年十一月五日)【韓国語】、『春園李光洙　親日文学全集Ⅱ』(ピョンミン社、一九九五年)所収

(18) 李光洙「すべてを捧げる」(「毎日申報」一九四五年一月十八日)【韓国語】、『春園李光洙　親日文学全集Ⅱ』(注17を参照)所収

(19) 李光洙『我が告白』(チュンチュ社、一九四八年)【韓国語】、『全集』十三巻

(20) 以下、二回目の留学時の世界情勢と留学生の動き、及び李光洙の活動については木村幹の論文(注9を参照)を参考にした。

(21) 姜徳相編『現代史資料　二六』(みすず書房、一九六七年)(一節)

(22) 鄭明煥「李光洙の啓蒙思想」(「文学と知性」一九七三年、春)【韓国語】。鄭明煥は、李光洙の「朝鮮青年独立団宣言書」の起草、上海臨時政府への参加などを一時的な条件反射と見ている。イ　ドンハ『李光洙――「無情」の光、親日の闇――』(近代人物韓国史　五〇三)(東亜日報社、一九九二年)(三章)【韓国語】。イ　ドンハはこの問題について二点を指摘する。一つは、「朝鮮青年独立団宣言書」が「個人の名で発表された私的な作品ではなく、一つの集団の立場を表明する宣言書の性格を持つ」こと、もう一つは、以前からの李光洙の立場は「妥協的改良論」であり、その立場は「抗日独立運動の成功が客観的に見て全く不可能だという判断」を「前提」にしたものだが、第一次世界大戦後の世界情勢の変化によって、李光洙のその「前提」が揺れたからではないかということ。

(23) 李光洙の独立運動家に対する印象は大変悪かったらしく、小説「再生」(「東亜日報」一九二四年十一月九日～一九二五年九月二十八日【韓国語】)、『全集』二巻)では独立運動家を否定的に扱っていて、「一方的な非難、悪意に満ちた誹謗」が見られる。――ミン　ヒョンギ『韓国近代小説と民族現実』(文学と知性社、一九八九年)(一九二〇年～三十年代独立闘争の文学的形象化と作家意識)【韓国語】

(24) 「日本国民に告ぐ」(「独立」一九一九年八月二一日)。

(25) 注19に同じ

(26) 木村幹（注9に同じ）はこの問題に全く触れていない。それは木村氏が、李光洙の帰国及びその後の動向を彼の内的な必然として把握しようとしたからだろう。ただその意義とは別に、総督の、文化政治の一貫としての朝鮮言論機関への関与に触れなかったことはその論文が持つベクトルにそぐわないものがある。

(27) 姜東鎮『日本の朝鮮支配政策史研究』（東京大学出版会、一九七九年）（四章）

(28) ウィ ギボン『書き直す東亜日報史――インチョン（号）キム ソンスと東亜日報、その汚辱と背反の歴史を探して――』（図書出版ノクチン、一九九一年）（三章）【韓国語】

(29) 辛日鎔「春園の民族改造論を評す」（「新生活」一九二二年七月）【韓国語】、『日帝下雑誌抜萃植民地時代資料叢書　四巻』（政治編）（啓明文化社、一九九二年）所収

(30) 李明宰（注4を参照）（二章）。李明宰は、李光洙と総督府との癒着問題に触れて次のように述べている。日本は「崔南善・李光洙などを先頭に立てて、民族的劣等感を含んだ民族改良主義を流布させ、当局の文化運動と一致させたのである」。

(31) 花田清輝「朝鮮民族の史的変遷」（「我観」一九三五年十一月）、『花田清輝全集』（一巻）（講談社、一九七九年）

(32) 崔一秀は、「民族の運命は日帝の侵略とはなんらの関係もないという、いわば民族的歴史意識を捨象してしまった単純啓蒙的な考え方」と述べている。――「植民地時代の民族文学（前）――独立運動史の側面から――」（「韓国文学」一九八一年三月）【韓国語】

(33) 李光洙「民族的経綸」（「東亜日報」一九二四年一月二日～六日）【韓国語】、『全集』十七巻

――つづく――

（クォン ソクヨン・北海道大学助教授）